

バトンゾーン

第33回



全障研和歌山支部

小畠耕作さん



30年間（月1～2回）続く那賀青年学級。コロナ禍で休んでいましたが10月、久しぶりに集まりました

35歳の時に異動希望を出し、新設校のかわ養護学校に赴任し、高等部担当で進路指導部長も務めました。そこで初めて教職員組合と全障研に出会いました。当時高等部の職員全員が組合員。学部会では夜の7時、8時まで子どもたちのことについて話し合っていました。

そこで私よりも5、6歳年下の先生に、私の適応主義的な実践をとごとく論破されたのです。先生たちの教育観、子ども観、障害観、子どものとらえ方は今まで私が知らなかつたものでした。「このままではいけない」、そう思つた私は

全障研きのかわ養護学校サークル代表の南有紀先生から第2回青年期教育研究集会に誘われて参加しました。そこで見聞きしたことは、まさに目からうろこでした。

自己変革への道

そんな時に2冊の本に出会いました。その一つは、加藤直樹先生（立命館大学名誉教授）の『少年期の壁をこえる』（新日本出版社）です。「いくら教師や父母がどんなに立派な意図を持つ子どもたちに課題を与えたとしても、子どもたちの内面に入り込むことができないでいるなら、その教師の仕事ぶりは、やみくもというものである」というのです。この言葉から、結局、本人をそ

ればならないのだと学びました。

もう一冊は愛知のろう学校教員・竹沢清先生の『子どもの真実に出会うとき』（全障研出版部）です。そこには体育館での終業式で、式が終わって諸連絡に移つても自分の席に着けないとし子の実践が綴られています。竹沢先生は一度に二歩ずつしか進めないとし子が、7回8回と同じことを繰り返し、今の自分の力で確実に自分の席に近づく姿を「とし子、見事だ！」といるのです。さらに本に書かれている、「自分の今の子どもをとらえる力に応じてしか子どもは見えてこない」というのはこのことだと思いました。

私は全障研や2冊の本と出会

つて、なぜこんなことが今までわからなかつたのか、がむしやら一生懸命な自分を否定していました。「自己変革は自己否定を伴う」という竹沢先生の言葉は私の心を見透かしているかのようでした。

生き方に悩んだ末の教師
私は本州最南端、和歌山県串本町で生まれました。勉強よりもスポーツの方が好きで、高校ではソフトテニスで近畿三位になつたこともあります。高校卒業後は大阪へ出て、昼間は事務用品の商社に勤め、夜は夜間大学に通いました。大阪で一旗揚げたいと思つていましたが、大きな仕事はコネの世界であることに直面し、挫折。自分の生き方に悩みました。

自分の生き方を考えた時に、自分自身に正直に生きるには教師しかないと思いました。教師は一人で授業をするので教室では、自分の思いを貫けるのではなかつたんです。ちょうどその頃、養護学校に勤めていた従姉から「スクールバス介助員をしながら通信教育で教員免許をとらないか」と声をかけられ、スクールバス介助員になりました。

そこで初めて障害のある子ども自身に正直に生きるには教師しかないと思いました。教師は一人で授業をするので教室では、自分の思いを貫けるのではなかつたんです。ちょうどその頃、養護学校に勤めていた従姉から「スクールバス介助員をしながら通信教育で教員免許をとらないか」と声をかけられ、スクールバス介助員になりました。

衝撃の出会い

もたちと出会いました。障害についての知識もなく、最初は子どもに囁みつかれないか、睡をかけられないかと不安いっぱいでしたが、子どもたちと握手をすることから始めました。朝、6時半にバスに乗り、昼間は介助職員として教室に入りました。1年後には、教員免許を取得し、1975年、25歳の時に和歌山県立紀北養護学校園部分校の講師に採用されました。中学校の担任でした。

生き方に悩んだ末の教師

もたちと出会いました。障害についての知識もなく、最初は子どもに囁みつかれないか、睡をかけられないかと不安いっぱいでしたが、子どもたちと握手をすることから始めました。朝、6時半にバスに乗り、昼間は介助職員として教室に入りました。1年後には、教員免許を取得し、1975年、25歳の時に和歌山県立紀北養護学校園部分校の講師に採用されました。中学校の担任でした。

障害のある青年たちに自分らしく生きる青春時代を（上）